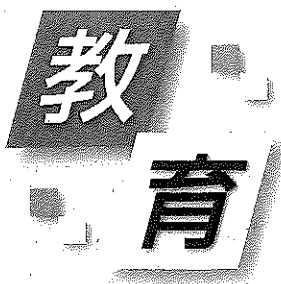


# 地域と学ぶ

山形大地域教育文化学部

「画家猫(ミケニヤンシエロ)はスランブに陥り、ある日アトリエを飛び出します。金山町を訪れ、美しい風景や名物の食事、優しい人たちと触れ合い、次第に元氣を取り戻し、スランブを抜け出して名画を完成させました…」

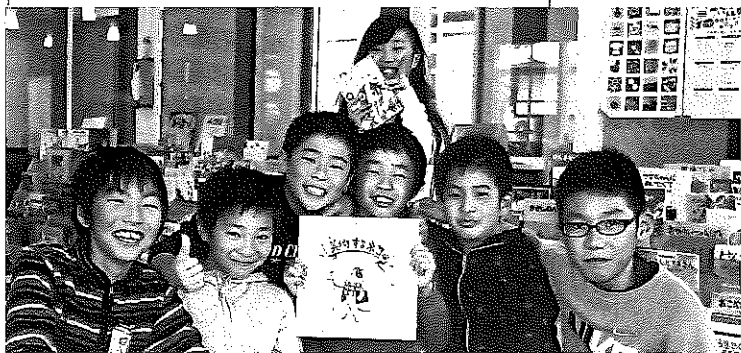
このお話はSession/Project(セッション・プロジェクト)「ヤマダイのお造り2015」という取り組みで、地域造形文化実践演習の受講生と大学院生、絵画研究室ゼミの学生たちがミケニヤンシエロ



芸術(絵画・版画) 八木文子教授

▽1968年生まれ、東京都出身。山形大着任は2001年。

絵本を手にする金山小の児童  
＝2016年2月、金山町・交流サロン  
ぼすと



今ある技術と人、その条件が作り出せるリソースで何ができるか。セッション・プロジェクトはこれからも芸術と地域の架け橋となる取り組みとして、常に生

が骨子となります。版画絵本は金山小、明安小、有屋小の3校と町の図書館に寄贈されました。まちの資産や風土、生活を織り交ぜたこの版画絵本に触れて、猫の目がいつしか子どもたちの目になり身近な町を歩き、将来古里を思い描くとき、絵本にある風景が日常の一瞬にある一瞬として記憶の扉を開ける鍵のような役割になることを期待しています。

## 猫の目線で金山を絵本に

エロの目になって金山町をうな「持続性のある仕組み」地域の一人一人の記憶に残成変化を問いかけていきま  
訪れ、フィールドワークを考察するアートプログラす丁寧な活動をーと質を委す。11月1回掲載します  
通じて体感、体験し、まちムです。そもそもは地域側化させました。  
の記憶として残る1枚の版からの要請で始まったこの 学生と地域が共に進歩す  
画がつづられた絵本「美術プロジェクトも7年目を迎る双方向の学びを獲得する  
するネコin金山」として え、アートフィステイバル、ためには、町おこしのな  
完成させたものです。 「ふるさと壁画」などさま ベントから日常へとアート  
プロジェクトは、大学とさまに活動してきました。 のベクトルを切り替えるこ  
地域が協働し、今ある生活 その一つ「ヤマダイのお造と、ソフトのリノベシヨ  
がさらに良いものとなるより」は2014年度以降、 ンから改善を図るプロセス

